

少子高齢化社会の牧会論

—マギー・クーンの高齢者解放思想に学ぶ—

田 島 靖 則

1. 序

「ある牧師と信徒たちは、彼らのもっぱら壮年者と高齢者を牧会対象としていることを自己批判して、『我々の教会は死につつある。我々は高齢者ではなくて、若者たちと活動したいのに。』と言っている。」¹

これは現代日本の教会事情を批判的に語っている言葉ではなく、今から30年近く前に、当時のアメリカの教会事情を憂える声として記録された言葉である。

規模や程度の違いがあるとはいえ、30年前のアメリカにも、現代日本のキリスト教会で牧会に携わる者たちが抱えているのと同じ悩みが支配的であったということは興味深い。そしてこの課題は、現代の、特にアメリカ都市部にある教会では、依然として支配的な問題として残されたままである。

1970年代、人種問題において、また性差別問題において、キリスト教会は積極的に神学的論陣を張った。それらの成果は、いわゆる一連の「解放の神学」として結実し、今に至っている。そのような社会的背景を受けて、「年齢による差別」の問題を皮切りに、「古い」そのものの価値を問直す動きが、アメリカ東部の都市、フィラデルフィアの長老派教会に属する一信徒マギー・クーン (Margaret E. Kuhn) の呼びかけで始められたことはあまり知られてはいない。センセーショナルであった黒人解放や女性解放運動ほど注目されなかったこの動きに対する評価は様々であろうが、この運動が「教会内」の働きとして評価されなかったことの一因は、公表された彼女自身の私生活に含まれた特定のスキャンダルにあったのかもしれない。²ともあれ、教会の地下室で産声を上げたこの運動に携わる者たちは、後に「グレイパンサーズ」という名前を与えられて、全米規模の NGO へと成長していく。

この「グレイパンサーズ」の創始者であるマギー・クーン (Margaret E. Kuhn) は、当時のアメリカにおいては、ラルフ・ネーダー (Ralph Nader) に比肩される社会運動家として認識されており、政治的にも大きな影響力を持っていた。

彼女の著作や、その発言を丹念に検証することにより、高齢に達する信徒を多く擁する現代日本のキリスト教会が持つ使命とその可能性を、改めて考えてみたい。

2. マギー・クーン (Margaret E. Kuhn) の生立ちと、高齢者問題に取り組むまでの歩み

マギー・クーン (Margaret E. Kuhn) は、1905年8月3日に祖母の家があったニューヨーク州

バッファローで生まれた。当時父親はテネシー州メンフィスに居を構えていたが、母親が南部の封建的な雰囲気嫌ってバッファローを出産場所を選んだのだと彼女自身は述べている。両親が出会った時に、既に父親は長老派教会に属しており、後にオハイオ州クリーブランドで長老としての職責も果たしている。彼女が小学生の頃、工業都市クリーブランドではエリー湖の水質汚染から公害問題が取りざたされ、町の有力者が集まる Old Stone 教会でも勉強会が開かれた。そこでは神学的議論が交わされ、「被造物の管理者として、神の裁きの下に地球を守る」という立場が明らかにされる。また、彼女の父親の神学的立場は極めて自由主義的で、ファンダメンタリズムへの批判的視点を持ち、聖書は逐語的に解釈されるべきではなく、神話は象徴的意味において読まれるべきであるという信念を持っていたという。³

こうしてマギー・クーンは、正義と社会秩序についての神学的感性を、子供の頃から主に父親を通して学んでいた。

1926年にクリーブランドの女子大学を卒業した彼女は、YWCA で貧しい勤労女性を組織して教育の機会を与える仕事に就いた。1930年に家族とともにフィラデルフィアに転居し、現地の YWCA で引き続き勤労女性部門の仕事を担当した。この間彼女は YWCA 職員として、コロンビア大学とユニオン神学校でも学んでいる。特に影響を受けた思想として、H.E. フォスディック (Harry Emerson Fosdick) の「キリスト教行動主義」を挙げている。フォスディックの「すべての世代において聖書は新たに解釈されるべきであり、その意味するところは今日的な問題に応用されるべきである」という主張を彼女は記録している。⁴また、最も印象に残った神学者としてライホルド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) の名前を挙げている。彼女はこれら YWCA での働きをとおして、キリスト者のみならず非キリスト者のために奉仕するという自己定義について語っている。

彼女が終の住み処を構えることとなったフィラデルフィアは、極めて人種的緊張の高い街であり、彼女は好むと好まざるとにかかわらず、日々人種問題と直面することとなる。多くの白人の友人たちが、次々にフィラデルフィアを後にして郊外へと転居するのを尻目に、彼女はあえてフィラデルフィアに住み続けることにこだわった。

彼女が30歳の時、教会の役員 (deacon) に選ばれ、後に長老へと推薦されるも保守的な牧師の反対にあい、女性長老になる道は閉ざされる。⁵にもかかわらず彼女は長老主義の知的側面、特に社会正義と倫理的価値の不断の分析を高く評価している。彼女は長老派のキリスト教信仰理解をすべて受け入れるわけではないと断った上で、我々すべての人の内には聖霊がいて、我々が打ちのめされるような時、我々を支えてくれるのだという聖霊理解を示している。また社会活動家としての自分は、旧約聖書に示された「慈しみと義」の概念に影響を受け続けているとも述べている。

彼女が自伝の本文中で引用している唯一の聖書箇所は、旧約聖書ミカ書6章8節b、すなわち「主が何を前にお求めおられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」である。

戦後彼女は転職し、アメリカ長老派教会の本部事務局にある社会・教育局に就職する。そこで E. C. ブレーク (Eugene Carson Blake) らの人種隔離政策反対運動に共鳴し、「キリスト者は、神を白人であると考えることを止めるべきである。それはアメリカの偶像だ。」というブレークらの「解放の神学」に触れている。また彼女は1964年に6ヶ月間のサバティカルを取り、サンフランシスコ神学校で「貧困と倫理」の講座を教えている。

1969年、彼女は「老いについてのホワイトハウス協議会」に、教会のオブザーバーとして出席し、この頃から高齢者問題に大きな関心を寄せるようになる。彼女は、ほとんどの教会が高齢者の本当のニーズに気づいていないことを指摘するようになる。

1970年、彼女自身の定年退職を期に、同年齢の5人の女性とともに高齢者問題についての勉強会を開始する。「我々は年老いたとは感じていない。むしろ新卒の時にも増して、ラディカルで新しいアイデアに満ちており、沢山の意見を持ち合わせている。我々は人生の終わりにさしかかったのではなく、クライマックスにさしかかったところなのだ」と考えた彼らは、同調者を募るためにコロンビア大学の施設を借りて、100人規模の集会を開催した。「社会の高齢者は、偉大な国家的資源であるにもかかわらず、まったく認められず、価値を与えられず、利用されてもいない」⁶という彼らの主張は、多くの高齢者に歓迎を持って迎えられたのである。

3. マギー・クーン (Margaret E. Kuhn) の高齢者観

1977年、サンフランシスコ神学校の上級牧会学プログラムでマギー・クーンは講師を務めている。そこで12人の牧師と1人の信徒を交えて生まれた対話は、すべて“Maggie Kuhn on Aging”という1冊のペーパーバックにまとめられている。

まずはじめに彼女は現代を、「解放と自己決定と自由の時代」と定義し、非白人は人種差別と闘い、女性は性差別と男性による支配と闘い、若者と高齢者は年齢差別と闘い、第3世界の開発途上国はアメリカ帝国主義とパックス・アメリカーナと闘っていると切り出している。これらはすべて「新しい人間性」のための闘いであると語っている。

(1) 老年期の理解のために

彼女はまず、巷にはびこる「老年神話」から自由になる必要性があると主張する。彼女の語る「老年神話」とはすなわち、以下のような内容を指している。

- 1) 老年期は良くない。それは個人的、社会的災難である。
- 2) 老年期は誰もが避けたいと思う「病気」である。
- 3) 老年期は責任からの撤退である。退職を強要され、ある人々はそれを人生からの引退と同一視する。
- 4) 老年期は思考停止状態である。老衰で思考停止するため、それはお遊びと居眠りの時であり、ただビンゴとソープオペラだけが慰めである。
- 5) 老年期にセックスはない。性別は意味を持たない。

これらの「老年神話」に対して、彼女の主張は明解である。すなわち「我々は『シニア・シチズン』でも『ゴールデン・エイジャー』でもない。我々は年長者（長老）である。我々は経験を積み、成熟しており、社会の存続のために大人としての責任を負う者である。我々は、しわくちゃの赤ちゃんでもつまらない敗北者でもなく、また意味なく無駄な時間を生きている存在でもない」というわけである。⁷

しかし教会は、そのような高齢者の姿を見誤り、老人ホームに保護したがる「ホーム症候群」や、「ゴールデンエイジクラブ」などという「榮譽あるベビー・サークル」に入れようとする「お世話とレクリエーション症候群」に陥っていると指摘する。確かに高齢者にも、食事、洋服、住

居、医療ケア、友人そして十分な収入と生活の目的が必要であり、そのために教会も「お弁当宅配サービス」、「友愛訪問」、「移動介助」などで貢献している。それらのサービスは良いものではあるが、すべて対症療法であり、「老年神話」を支える価値体系を覆すものではない。つまり彼女がまず教会に求めるのは、老年者に責任ある成熟した大人として接するという、ごく当たり前のことなのである。

だから、教会に数多くの高齢者がいることで「死にかけた教会」などと考えるのではなく、むしろ「技能の宝庫」、「豊かな貯蔵庫」、「見過ごされている未使用の人材バンク」、そして我々の病んだ社会を癒し、刷新するために望まれる刺激的な力がそこにあると考えるべきだという。そのために牧師も型通りの牧会を離れて、「高齢者のために」という視点に加えて、「高齢者と共に何かのために働く」牧会を考えるべきだと指摘するのである。⁸

また、彼女は老年期を生きる者の目標は、成熟し、進化し、成長する大人になることであるとし、この場合の成長とは、もっぱら「霊的」な成長を指すと述べている。これら一連の「変化」には、変革と行動への関与が含まれ、また同時に宗教的動機づけと、絶え間ない霊的成長がともなうという。⁹ここに彼女の高齢者観独自の見解がある。つまり老年期は、決してピークを過ぎた「下り坂」ではないという発想であり、それは成長の過程であるという理解である。もし老年期もまた成長の時であるとすれば、その貴重な時が、ビンゴゲームや風船パレーのような「暇つぶし」によって浪費されることに、彼女が強く反対することも理解できる。

(2) 過去を振り返ること

加えて彼女は、高齢者は「歴史的感覚」を身につけるべきであると主張する。そしてもし我々の社会がそのような高齢者の経験的価値を軽視するならば、社会は大きな損失を被ることになると警鐘を鳴らす。そこで教会は、そういった「経験知」を、様々な問題の解決のために用いる義務があると言うのである。¹⁰これはつまり、個人と社会を結びつける「接点」を、高齢者の「昔話」をとおして学ぶ作業でもある。¹¹

(3) 高齢者施設について

また、実際にこの社会にある多くの高齢者専用施設が教会によって設立され、経営されているという事実に触れて、彼女は厳しい施設批判を展開している。特に全米に展開されている大規模なリタイアメント・コミュニティーの多くが自己充足的 (self-contained) であることを例に挙げ、地域社会と接点を持たないそれらの施設を、年齢隔離施設 (age-segregated institutions) と呼んでいる。そういった施設群は、極論すればみな一種の「ベビーサークル」なのだということになる。¹²だから、教会が経営する高齢者施設は他よりも高い基準、高い機能そして卓越性が求められるべきだという。つまり生の質 (quality of life) への配慮が他の施設にも増して求められるということである。¹³

(4) 定年退職制度について

また、彼女が高齢者問題に関わるきっかけとなった定年退職問題については、これを撤廃すべき11の理由を述べている。そのうちの3つを紹介したい。まず最初に、定年退職制度は能力や意欲に関係なく、ただ年齢を根拠とした差別にほかならないということ。次に、それは多くの人を肉体的にも精神的にも傷つけているという事実。最後に、定年退職制度は高齢者への否定的ステ

レオタイプ化（たとえば、高齢者は非生産的であり、ただ余暇のためだけに生きてるとか、彼らはもはや若い人たちと競争力を持っていないとか）を永續させるということを挙げている。¹⁴彼女の具体的提案は、「可変的退職政策」を実現するための国家的努力の要請という形で、議会に働きかけがなされている。¹⁵また、彼女の呼びかけには、高齢者が政治的圧力団体として実力を行使することも含まれており、具体的には大企業の株主となっている高齢者は団結して企業側に定年退職問題の改善を要請すべきであるとも述べている。¹⁶

(5) ライフスタイルの変革

彼女が教会に希望する役割の一つとして、高齢者に今一度学びの時を持つように勧めることが挙げられている。具体的には、高齢者がもう一度学校で学びたいと思うように励ますという役割である。実際彼女は、ウィスコンシン大学の社会学部に掛け合っ、高齢者がいくつかのクラスで無料で学ぶことを可能とした。しかし彼女の呼びかけは必ずしも成功しなかったのである。多くの高齢者は、他の人々の好奇の目を気にして、クラスに参加することを躊躇したのであった。しかし彼女はここでも、成功する老年期の目標は、成長し続け、学び続けることで、成熟した責任を負う大人になることであると強く主張している。¹⁷

そして、彼女が挙げる高齢者のもう一つの教育的課題がある。これが「部族の長老」としての役割である。部族の長老は、部族の生き残りとその未来について責任を持つ。「我々高齢者は、社会の未来派であるべきだ」。とは彼女の言葉である。¹⁸

また、教会のもう一つの使命は「親子関係の調整」にあるという。特に高齢者とその子供たちとの家族関係は、時として敵対的になることもある。場合によっては、同居が良い結果を生まないこともある。だからこそ、賢明なカウンセリングが必要であり、教会はその役割を担うことができるというのである。¹⁹

彼女は、これら一連の高齢者の新しい役割について、以下の7項目にまとめている。

- 1) 新しいライフスタイルの試験者（先駆者）になること。
- 2) 年齢、人種、貧富の差を超えた、新しい連合体の設立。
- 3) 議会の監視者になること。
- 4) 消費者の権利擁護のために、警鐘を鳴らすこと（医療・福祉においても）。
- 5) 各メディアの監視者になること。
- 6) 病んだ社会の癒し人になること。
- 7) 現代社会の批判的分析者であり、同時に未来の設計者であること。²⁰

(6) 高齢者に対する教会の使命

マギー・クーンは、高齢者問題に際して教会が担うべき使命を10の項目にまとめている。

1) 教育的役割

教会は今まで必ずしも高齢者の知的・霊的成長について十分な注意を払っては来なかった。そこで彼女は、教会を媒介とする多世代的教育の機会が持たれるべきことを提唱する。彼女は一例として、フィラデルフィアのあるルーテル教会の取り組みを紹介している。当時のフィラデルフィアは、多くの白人が郊外へと転居し、その後には黒人（アフリカ系アメリカ人）が入居するというような住民の入れ替わりが激しく、特に白人の高齢者は人種的緊張の高まりや犯罪率の上昇に恐れを抱いていた。そこでルーテル教会の若い牧師は、地元の高校のプロジェクトとして高齢者へ

のインタビューの機会を設けた。このことがきっかけになり、地元の黒人高校生がチームを作り、高齢者へのエスコートサービスを開始した。彼らは高齢者の買い物に同行し、高齢者に対して加害者になるのではなく、逆にボディガードになったのである。²¹

2) カウンセリング機関としての役割

牧会カウンセリングの訓練を受けた牧師はもちろん、既に定年退職を経験した信徒が、退職期にある人々への訓練とカウンセリングを行うこと。²²

マギー・クーンはこのカウンセリング機能が、教会内だけでなく地域に開かれることを希望している。

3) 拡大的家族としての教会（会衆）

教会は、多世代にわたる様々な形態の家族、すなわち核家族、未亡人、父子・母子家庭などの集合体である。そこで教会内においては、血縁関係によらない可能な限りの相互援助や心理的サポートが形成できる。小規模な食事の宅配や身の回りのお世話、また介護サービスなども考えられる。教会役員はそれらのサービスのモニター役をつとめ、その改善に注意を払う。その際牧師は、その新しいライフスタイルの調整役、組織者そして奨励者としての役割を果たす。²³

4) 福音の説教役

福音の説教は、もっぱら牧師の専門的領域と考えられているが、たとえば牧師の説教準備に、高齢者を含む小グループが参加して、牧師がより多角的なインサイトを得られるように手助けすることも考えられる。この原案はマギー・クーンのオリジナルではないが、彼女はこの案に強く同調している。彼女は、説教はただ信徒の信仰の涵養のために語られるのではなく、信徒が社会的責任を負った大人として継続的に貢献するために語られるものであると述べている。²⁴

5) 社会的証人としての役割

この病める社会の分析者、批判者であること。具体的には、地域の評判の悪い老人ホームを改革するために、『市民活動ガイド～老人ホーム改革～』のような資料を用いること。²⁵

6) 死の準備教育機関として

教会は、尊厳ある死について教育し、人は尊厳をもって死ぬ権利があることを教えるべきである。そのためにリビングウィルについての詳細な学びが準備されるべきである。また、地域の葬儀屋に葬儀費用の開示を求め、葬儀について総合的に学ぶ必要もある。彼女自身は、シンプルな葬儀を勧めており、「悲しみは葬儀の規模や棺桶の値段では計れない」と述べている。²⁶

7) シルバー産業への態度を明らかにすること

単なる友愛訪問機関になるのではなく、利用者と家族の福祉のために行動すること。²⁷

8) 教会施設を、診療所、多目的ホール、炊き出し拠点として使用すること

目的はあくまで高齢者のニーズに応えることと、新しい情報を提示することにある。間違っても主要な活動が「ビンゴゲーム」のような暇つぶしであるべきではない。²⁸

9) 老いに関する専門部署を立ち上げること

教会においては、「老い」に関する総合的部署が必要になる。その役割は、老いの学びの提供から始まって、たとえば孤立しているティーンエイジャーなどを対象とした、養祖父・養祖母プログラムを仲介することもできるだろう。また、特に株式所有者に期待する役割としては、企業の株主会における倫理カウンセラーとして企業経営の見張り役になることを期待したい。そこでは公害問題などでの貢献が期待できると思われる。²⁹

10) 神学教育の変革推進者としての役割

神学教育においては、一般に牧会教育、または教会の高齢会員に関する牧師の役割についてはほとんど注意が払われてこなかった。高齢の信徒は、定年退職の苦しみを知っており、また婦人たちは、定年になった夫が職を失うというトラウマの大きさを理解している。また、伴侶を失った悲しみとどう付き合ったら良いのかを知っている者もある。高齢者は決して、余り者、無駄な存在、役に立たない人たちなどではない。彼らは「センス・オブ・ヒストリー」を身につけている存在である。³⁰

マギー・クーンは以上のような提案をもって、教会は抑圧と強制の構図のもとにあるすべての年齢による差別との闘いに立ち上がるべきであると言っている。そのためには、教会と社会双方に対して、年齢差別が人々にいかにダメージを与えるかということを知らせるために、解放の神学者や聖書学者、キリスト教倫理学者や教会教育関係者の協力が必要であると述べ、聖書的・神学的な思考の枠組みは、教会生活と対外活動に不可欠な変化をもたらす必須条件であると述べている。彼女は「第二の宗教改革は、今まさに飛び立つ時を待っている！」と、期待を込めて語っている。³¹

しかし一方で彼女は、彼女が設立者となったグループ「グレイパンサーズ」においては、神学的な枠組みよりも、むしろ社会分析と社会的戦略において、強い倫理的・道徳的基盤の上に立っているということを認めている。³²

マギー・クーンの当初の思惑とは違った形で、彼女の高齢者解放思想を担ったのは、結果的には教会ではなくむしろ「グレイパンサーズ」のような組織であった。「グレイパンサーズ」の事務所は、1971年より西フィラデルフィアのタバナクル教会の地下室にあったことが知られているが、1977年には既にペンシルヴェニア大学に近いチェスナット通りのビルに移転している。もちろん「グレイパンサーズ」の活動を担った者のうちの多くはキリスト者であったはずだが、しかし彼女らの活動がマスコミに大きく取り上げられ、全米規模で賛同者を獲得し、主要都市に次々と支部が設立されるという運動の展開に対して、キリスト教会の反応は、必ずしもマギー・クーンの期待ほどには大きくはならなかったのである。しかし80年代以降、全米の多くの神学教育機関が、「老い」についての講座を開講したことの功績の多くは、やはり彼女に帰せられるべきではないだろうか。

4. 結語：現代日本のキリスト教会における牧会への応用

日本文化に固有の敬老思想は、一般にその起源を儒教に求めることができるといわれる。当然のことながら、マギー・クーンの指摘する「老年神話」の多くは日本の現状には当てはまらない。しかし、「我々は老年者（長老）である。我々は経験を積み、成熟しており、社会の存続のために大人としての責任を負う者である。」という彼女の主張は、我々が無意識のうちに、「高齢者は、責任ある立場から撤退した隠遁者である」という老年神話に毒されつつあるという事実を気づかせてくれる。高齢者を敬うとは、ただただ高齢者にふかふかの座布団をあてがい、お茶とお菓子でもてなすことなどではなく、「豊かな知恵の貯蔵庫」である彼らとともに行動することなのだと思われさせる。

彼女が指摘する「教会の使命」の筆頭に挙げられている「教育的役割」においては、高齢会員に、さらに「学ぶ」と同時に「教える」ことが奨励されている。継続教育の勧めに関して言えば、現在多くの大学が地域の社会人に向けて大きく門戸を開きつつある。興味のある科目の聴講を奨励し、その成果を教会内で分かち合う機会を設けるのも良い。この学びが基盤となって、マギー・クーンらの勧めるような、環境、医療、福祉問題における制度批判や現状分析へと進むことも可能である。そうして「病める社会の批判者」としての高齢者の役割が明確になる可能性もある。また聴講ではなく、いくつかの大学で実施されている「長期履修学生制度」などを利用して、一般学生よりもゆっくりとしたペースでの学位取得の道も考えられる。幸いなことに全国各地にキリスト教主義の大学がある。それらの大学にコネクションを持つ牧師も多くいる。キリスト教主義の大学が、地域の教会とタイアップして、生涯教育のプログラムを準備することは可能である。同時に、高齢会員が講師を務める講座の開設についても、同じ要領で模索可能なはずである。教員と牧師は、それらのプログラムにおける調整役の役割を負う。

また、彼女が高齢者に期待する「部族の長老」としての役割も、この「教育的役割」に含まれると考えて良いだろう。この長老としての役割期待については、ヨーロッパ系白人で構成される教会よりも、アフリカ系アメリカ人の教会に見習うべき点が多くある。A. S. ウィンバリー (Anne Streaty Winberly) は、アフリカ系アメリカ人教会にある二つの固有の価値を指摘する。その一つが「敬意 (honor)」であり、残る一つが「魂の共同体 (soul community)」である。この前者は「興味を持って耳を傾ける」という態度を生み、後者は「歴史と文化と苦難の分かち合いを評価する感覚」である「民族意識 (peoplehood)」を生むのである。³³このように高齢者が「語り部」として活躍する場についても、キリスト教学校と教会との連携の中で、様々に可能性を広げることができるだろう。

また、高齢会員が「福音の説教役」としての役割を担うというプログラムについても、牧師の説教準備に高齢会員のグループが参加するという試みは、牧師の工夫次第ですぐにでも実行可能な教育的プログラムではないだろうか。このことによって、牧師が新聞の切り抜きをかき集め、適切な例話を採る時間も短縮でき、もっとリアリティに富んだ例話を用いることも可能になるだろう。

「死の準備教育」や「リビングウイル」についての学びは、既に新しい話題ではないためにここでは割愛したい。

定年退職についての準備教育は、小さなグループで行うよりも、地域や教区の教会が集まって実施することでより大きな効果を生むものと思われる。定年後に魅力的な社会活動を行っている教会員を講師として迎える講演会や、セルフヘルプグループ、ピアカウンセリングなどの受け皿をつくること。さらにマギー・クーンらの指摘にあったような「強制的定年退職制度」の問題点について学ぶことも考えられる。

彼女の指摘をヒントに、高齢会員という「豊かな知的貯蔵庫」を「開く」ためのアイディアはまだまだ考えられそうである。「高齢者は社会の未来派であるべきだ」という言葉は、未来の高齢者である我々にとっても、心地よく響く言葉ではないだろうか？

注

1. Hessel, Dieter (ed.), *Maggie Kuhn on Aging: A Dialogue*. The Westminster Press, Philadelphia, 1977, p.21.
2. 彼女は自伝の中で、アメリカ長老派教会の社会活動局勤務時代に、上司であったある牧師と愛人関係にあったと告白している。スキャンダルに敏感なアメリカのキリスト教界が、90年代以降彼女への積極的評価を控えたということは考えられ得ることである。詳細は Kuhn, Maggie, *No Stone Unturned: The Life and Times of Maggie Kuhn*. Ballantine Books, New York, 1991. p.41. を参照。
3. Kuhn, Maggie, *No Stone Unturned: The Life and Times of Maggie Kuhn*. Ballantine Books, New York, 1991. p.41.
4. Ibid. p.59.
5. Ibid. p.93.
なお、公式にはアメリカ長老派教会は、1930年に女性長老を認めている。
6. Ibid. p.130-131.
7. Hessel, Dieter (ed.), *Maggie Kuhn on Aging: A Dialogue*. The Westminster Press, Philadelphia, 1977, p.14.
8. Ibid. p.23.
9. Ibid. p.29.
10. Ibid. p.30.
11. Ibid. p.36.
12. Ibid. p.42-43.
13. Ibid. p.47.
14. Ibid. p.66-67.
15. Ibid. p.72.
16. Ibid. p.82.
17. Ibid. p.77-79.
18. Ibid. p.80.
19. Ibid. p.83.
20. Ibid. p.91-93.
21. Ibid. p.95-97.
22. Ibid. p.97.
23. Ibid. p.100-102.
24. Ibid. p.102-103.
25. Ibid. p.105.
26. Ibid. p.109-110.
27. Ibid. p.112.
28. Ibid. p.113-114.
29. Ibid. p.115-118.
30. Ibid. p.118-120.
31. Ibid. p.121.
32. Ibid. p.123.
33. Wimberly, Anne Streaty, Editor, *Honoring African American Elders*, San Francisco, Jossey-Bass Publishers, 1997, p. xii.
および、拙稿「敬老の宣教論～日本人とアフリカ系アメリカ人教会共通の伝統～」『キリスト教学』45号（立教大学キリスト教学会、2003年12月発行）を参照のこと。

参考文献

- Kuhn, Margaret E., *Get out there and do something about injustice*. Friendship Press, New York, 1972.
- Kuhn, Maggie, "Aging-Challenge to the Whole Society". *Empowering Ministry in an Ageist Society*. The program agency of the United Presbyterian Church, U.S.A., 1981.
- Kuhn, Maggie, *No Stone Unturned: The Life and Times of Maggie Kuhn*. Ballantine Books, New York, 1991.
- Hessel, Dieter (ed.), *Maggie Kuhn on Aging: A Dialogue*. The Westminster Press, Philadelphia, 1977.
- Wimberly, Anne Streaty, Editor, *Honoring African American Elders*, San Francisco, Jossey-Bass Publishers, 1997.
- "Kuhn, Maggie (Am. Activist)", *Encyclopedia Britannica 2003*, North Sydney: Encyclopedia Britannica Australia, 2003, DVD-ROM Edition.